

資料

ベーベルの女性論再考 (第1報)
—「ゲリッツェン女性史コレクション」及び本学「女性文庫」を利用して

伊藤 セツ

Materials : Rethinking on Women's Emancipation Theory of August Bebel (Part-1)

-Using by "The Gerritsen Collection of Women's History-1543-1949" and

"JYOSEI BUNKO Collection" of Showa Women's University

1. ベーベルの女性論と現代—研究の目的,方法,意義

Bebel, August (1840-1913,以下ベーベルと呼ぶ)は、わが国でも「ベーベルの婦人論」として知られているドイツの女性解放論の古典的著作『女性と社会主義』の著者である。戦前にわが国に影響を及ぼした欧米のポピュラーな女性論の古典を仮に3点挙げよというなら、丁度今年(1992年)出版200年を記念するメアリ・ウルストンクラフト(Wollstonecraft, Mary 1759-1797)の『女性の権利の擁護』(A Vindication of the Rights of Women 1792),ジョン・スチュワート・ミル(Mill, Jhon Stuart 1807-1873)の『女性の解放』(The Subjection of Women 1869),そして、本稿でとりあげようとしているベーベルのこの著(初版は1879)であろう。この3人のなかでベーベルのみがドイツ人であり、他の2人と異なって、女性と社会主義を結び付けた最初的女性解放論の主張者であった。

ところで、東西両ドイツが統一された歴史的年=1990年は、丁度ベーベル生誕150年であり、同年、統一直前の旧「ドイツ民主共和国」でベーベルの記念切手が出された(写真)。その前年、1989年は、上記『女性と社会主義』出版110年であった。1988年頃からそれらを記念したいくつかの出版物が当時の両ドイツで出されている(Bebel 1989, Seebacher-Brandt 1988, Stroech &-others 1989,倉田 1989, Gemkow & Angelika 1990)。その中には、1990年11月以降存在しない旧「ドイツ民主共和国」の出版物が数点あり、あたかもこの国へのレクイエムのような感を与える。

さらにさかのぼって1979年、『女性と社会主義』出版100年の折には、当時の両ドイツでそれぞれ新版が出版された(Bebel 1979, Bebel 1981) 他、旧「ドイツ民主共和国」



で、2種の出版物が出された(Women's department of SED Central Comittee 1979, Allendorf & others 1979)し、わが国でも、倉田稔(1979a, 1979b),土屋保男(1979),白井厚(1979),犬丸義一(1980),西川正男(1980),らがベーベルについてのそれぞれに内容のある論評を書いている。倉田は、この蓄積をもとに、1989年の『女性と社会主義』出版110年に一冊にまとめた出版物を出している(倉田 1989)。

筆者も、ベーベルと同時代のドイツのクララ・ツェトキン(Zetkin, Clara 1857-1933)研究(伊藤 1969, 1984)との関連でベーベルには注意を向け、上述のような若干の資料の収集を心がけてはいたが、これまで、本格的にベーベルに向かいあうということはなかった。ところが、本学図書館が、1990年の暮れ、ベーベルの文献をも一定程度含んだ「ゲリッツェン女性史コレクション」(The Gerritsen Collection of Women's History—1543-1949)を、文部省の助成を得て購入した。同コレクションの由来、形成の経過、内容、利用の手引きに付いては、本学の掛川典子が解説している(掛川 1992)ので繰り返さない。筆者は、この貴重なコレクションを利用して、1世紀以上前から女性

論の古典として世界的影響を及ぼしたベーベルの女性論が、東欧・ソ連の崩壊という現時点でいかなる歴史的かつ現代的意味をもつものであるかの再検討が可能になるのではないかとの期待を抱いた(伊藤 1992)。

ちなみに、このコレクションのわが国での総代理店「丸善」の依頼で、「ゲリッツエン女性史コレクション」の中から、比較的重要な文献を選び出し、英・独・仏の三言語に限って、先進国の女性論や運動に関する文献の複写出版を編集した水田珠枝は、ベーベルについて、「わたくしが特に興味をもったのは、アウグスト・ベーベルが『女性と社会主義』以外の女性論の著作を書いていた事である」「ベーベルについては、宗教的立場からの批判

Germanicus, *Bebel im Lichte der Bibel*, Leipzig, 1898-1899. がある一方で、男女同権を支持しつつ、結婚が女性の唯一の運命でないことを主張した Machtes, Dr., *Das Unrecht des Stareren in der Frauen-frage*, Leipzig, 1891. もある。当時の著作をたねんに読めば、ベーベルの提起した問題の意味とそれの受け止め方が、もっと解明されるのではないかと思われる(宣伝用リーフレットより、発行年不記)と触れている。筆者はこの指摘からも刺激をうけ、長期計画をもって、この仕事にとりかかる必要を感じた。研究の目的は、もとより、ベーベルの女性論の再考=歴史的・現代的意義を探ることにあり、「ゲリッツエン女性史コレクション」の利用は、その手段である。

アメリカのドノヴァン(Donovan, Josephine)は、その著『フェミニストの理論』(Donovan 1985, 小池訳 1987)の中で「私が到達した悲しい結論のひとつはフェミニストたちが幾度となく、おなじ車輪を再発見してきたということだ。…その多くが、一世紀以上まえから、くりかえしていわれてきた。フェミニストの理論のこの腐蝕が、ふたたびおこってはならない(訳書 P. 5)」と書いているが、この指摘はベーベルに関しても多分にあてはまる。しかし、現今の情勢の中では、現代のフェミニストの多くは多分ベーベルをひもときはしないであろう。本稿では、手始めにこの「ゲリッツエン女性史コレクション」の他、とりあえず、1991年、本学女性文化研究所開設5周年を記念して当研究所が図書館と共同で作成した目録によって所蔵文献の全容が明らかにされた本学「女性文庫」所収の関連文献を用いて、ベーベルのこの古典の資料的検討を試みる。なお、本学「女性文庫」の由来・収録文献については、柳秀子の解説を参照されたい(柳 1986, 1991, 1992)。

2. ベーベル『女性と社会主義』の出版、改訂の経過と各国語訳と「ゲリッツエン女性史コレクション」

当面、筆者の知る限りでのベーベルの女性論の出版・改訂、各国語翻訳の経過は、次の通りである。ベーベルのこの書は、1878年の「女性の現在と未来の地位について」という初めての社会主義的女性論の後、1879年のいわゆる『ベーベルの婦人論』の初版(*Die Frau und der Sozialismus*)から、ベーベル没年の1913年まで53版を重ねたが、その間、1883年の第2版に小修正(西川 1980, P.6 参照)、1891年の第9版、1895年の第25版、1902年の第34版、1909年の第50版と4回大幅な改訂を行い、実に30年も手を加え続けたことが知られている。それだけに、このうち、「ゲリッツエン女性史コレクション」に収録されているものは何かが注目されるが、以下、ベーベルの女性論が今日見る内容のものに形成されていく過程を、書名、出版年、出版地を中心に列挙する(倉田 1989, PP.98-99 参照)。「ゲリッツエン女性史コレクション」に収録されているものには同コレクションの番号を付した。

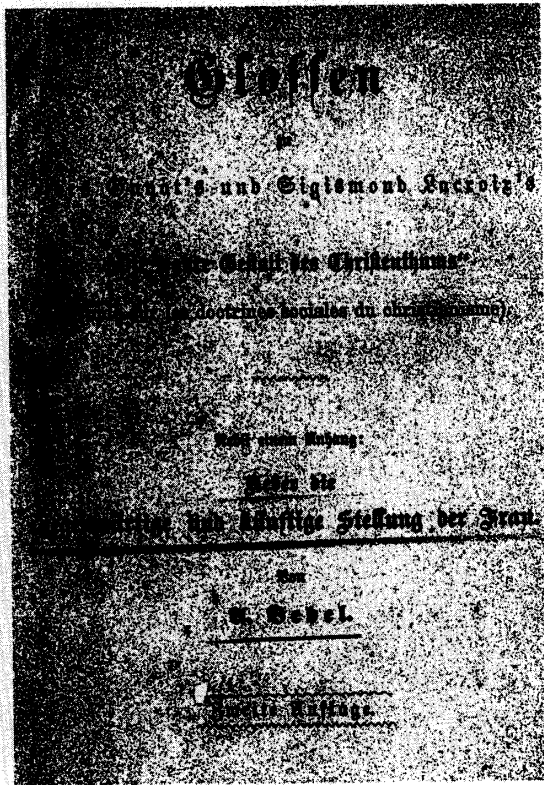
ベーベルの初めの女性論に関する書き物は、ベーベルが、ラファルグ(Lafargue, Paul 1842-1911)とも親交のあったフランスの政治家、自由貿易論者ギョー(Guyot, Yves 1843-1928)と、ラクロア(Lacroix, Sigismond)の著『キリスト教の社会的意義』の翻訳(1876)をし、その2年後に同書を反論した際(『イヴ・ギョーおよびシジスモン・ラクロア著「キリスト教の真の姿(キリスト教の社会的教義の研究)」-付録に添えて、女性の現在と未来の地位について、あるドイツの社会主義者による翻訳および序文をそえて』)の、この付録である。この部分は、*Über die gegenwärtige und künftige Stellung der Frau*, 1 Aufl. Leipzig, 1878 44 S. として現れた。倉田によれば、この初版は、アムステルダムの国際社会史研究所にあり、(倉田 1975, P.81)、倉田はこれを1975年に前半(倉田 1975)、その後全訳した(倉田 1979, 1989)。この2版が2種類「ゲリッツエン女性史コレクション」に収録されている。すなわち、

2 Aufl. Hottingen-Zürich: Volksbuchhandlung, 1887 47 S. 21cm. (D 186)

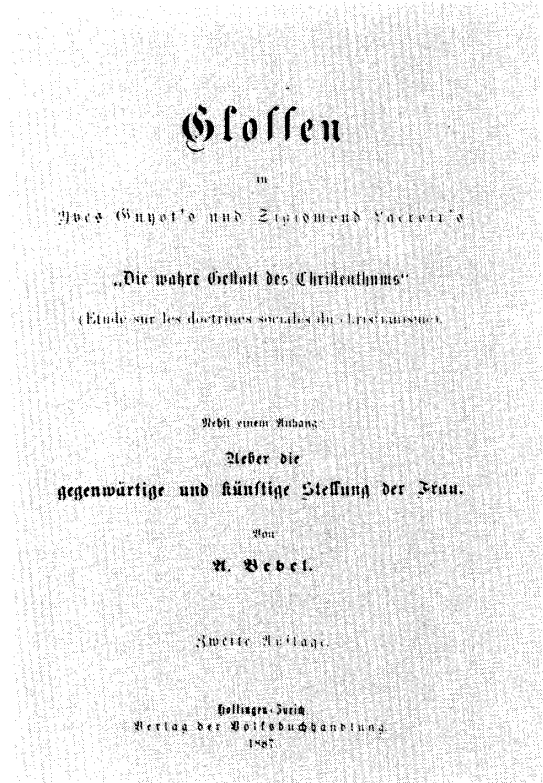
2 Aufl. Hottingen - Zürich: Volksbuchhandlung, 1887 47 S. 21cm. (D 1044)

である。この、D 186とD 1044は内容は同じであるが印刷は別物である。

この最初の女性論は、近代家族の本質を暴露し、性と階級の問題を提示し、女性は男性プロレタリアよりもより不利な地位にあるとして、未来の「社会主義」での解決を予



D 186



D 1044

告する。「社会主義」が何であり、なぜそこで解決されるかの言及はここでは行われていない。

さて、いわゆる「ベーベルの婦人論」の方に目を転じよう。初版(1 Aufl. *Die Frau und der Sozialismus*, Zürich-Hottingen, Verlag der Volksbuchhandlung, 1879 180 S.)はLeipzigで印刷され、15,000部以上出版した(Gemkow 1969 S.54)というが、筆者はLeipzigのDeuche Buchereiでも、この初版を発見できなかった。2版(2 aufl. *Die Frau in der Vergangenheit, Gegenwart und Zukunft*, Hottingen-Zürich, 1883 220 S. 22cm.)は、D 183として「ゲリッツェン女性史コレクション」に収録されている。第3-7版は1884-1887年に同上の出版社から、第8版は、同内容でLondonで1890年に発行されている(倉田 1975)。各版は2,500部とのことであった。

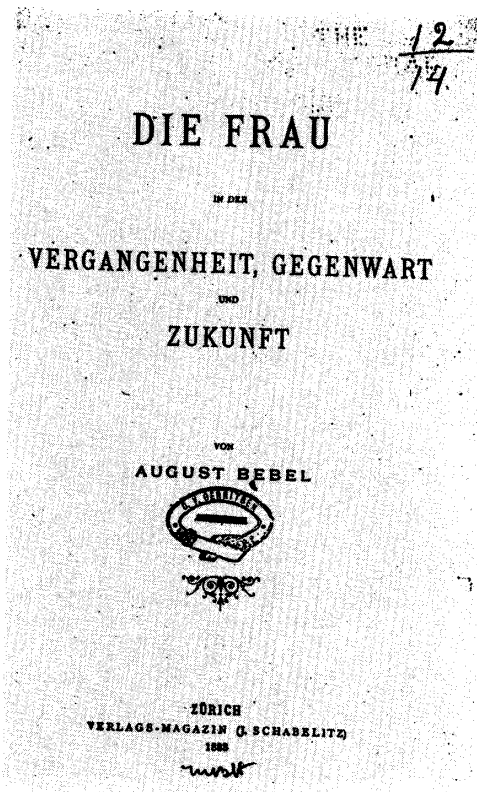
第9版は、改訂版で、*Die Frau und der Sozialismus* (*Die Frau in der Vergangenheit, Gegenwart und Zukunft*), Stuttgart 1891 328 S.(Internationale Bibliothek, Bd.9)として出されている。この9版は、東京都立川短大金子鷹之介文庫に所収されている。以下、10版から、54版まですべてStuttgartで発行されている。第11版は、11 neubearbeitete Aufl. 1892 386 S.として、第12-16版は1892年に、17-22版は1893年に、23-24版は1894年に、第

25版改訂版は1895年に496頁で、第26-27版は1896年に、28-29版は1897年に、30版は1899年に出版されている。

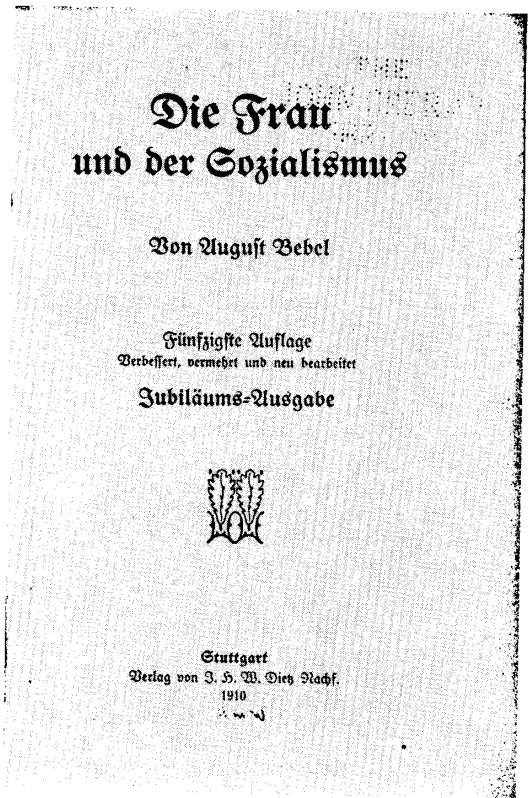
第31版は、*Die Frau und der Sozialismus*, 31 Aufl. Stuttgart, W. Dietz, 1900 472 S.20cm.で(D 184)として、「ゲリッツェン女性史コレクション」に収録されている。第32版は1903/4年、34-37版は38-41版1905年、42-43版は1906年、44-45版は1907年、46版は1908年、47-49版は1909年に出版された。最後の改訂版、第50版は、*Die Frau und der Sozialismus*, 50 Aufl. Stuttgart, J.H.W.Dietz, 1910, 519 P. 20cm. (D 185)として上記コレクションに収録されている。

第51版は1910年、52版は1911年、53版は1913年、ベーベルの没年に出された。その後、第54版は1921年に、また、Berlinで1923, 1929年にも出版されていたが、1933年、ヒトラーの時代に焚書の難にあい、第二次世界大戦後1946年に「ドイツ民主共和国」のディーツ社から、第55版が出された。

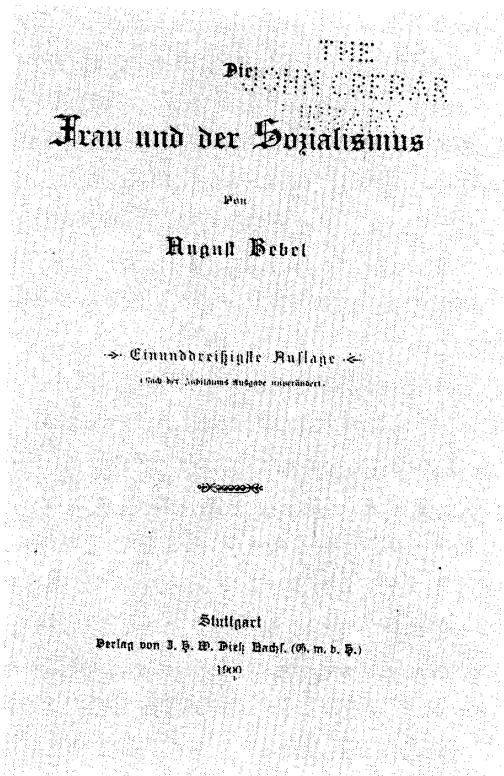
「ゲリッツェン女性史コレクション」には、初版とほぼ同内容と思われる1883年発行の2版(ただし、題名は*Die Frau in der Vergangenheit, Gegenwart und Zukunft*)がD 183として、また、2度目の1895年改訂の内容を伝える1900年発行の第31版がD 184として、最後の改訂版50版が、D 185として、計3冊収録されていることになる。最初



D 183



D 185



D 184

の1891年改訂と3度目の1902年改訂の痕跡をとどめる版が欠けているのが悔やまれる。

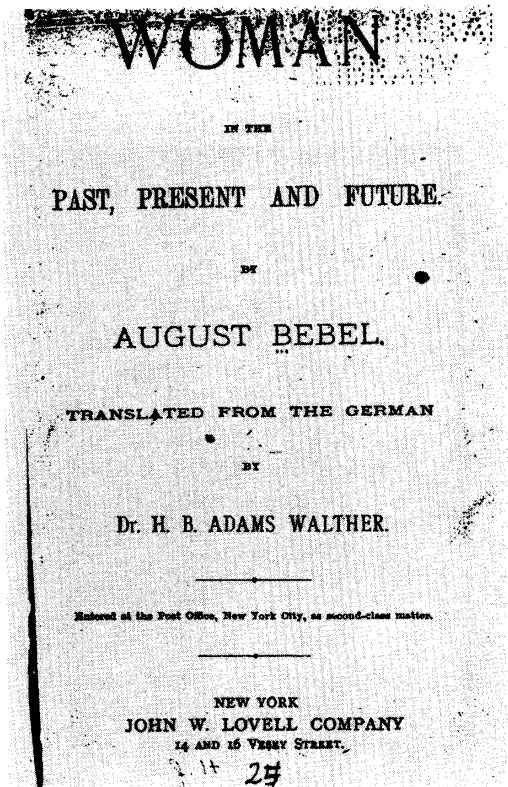
ベーベルのこの本は、文献に記述されている限りでも、アルメニア語、ブルガリア語、デンマーク語 (1885)、英語 (ロンドン 1885*、ニューヨーク1886*)、フィンランド語、フランス語(1891*)、オランダ語、ギリシャ語、グルジア語、イタリア語、日本語 (1923)、レット語 (1912*)、ノルウェー語、ポーランド語 (1987*)、ルーマニア語、ロシア語 (1895*)、スウェーデン語、セルビア語、スペイン語、チェコ語、ハンガリー語の20カ国語に翻訳されている

(Bebel 1983 S.704、出版年は書かれていない。日本語は含まれていない。*印は倉田 1989 p.61) が、「ゲリッツエン女性史コレクション」では、下記のもの、つまり、アメリカ英語3点、イギリス英語1点が収録されている。

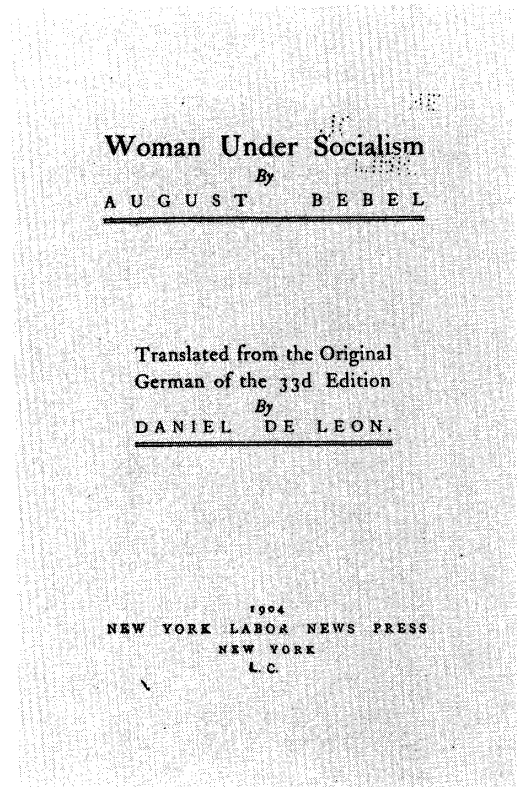
Women in the past, present and future, translated by H. B. Adams Walter, New York, J. W. Lovell, 1886 268 P. 19 cm (Lovell's Library)(A 188)

Women in the past, present and future, San Francisco, G. B. Benham, 1897 174 P. 24cm(A 190)

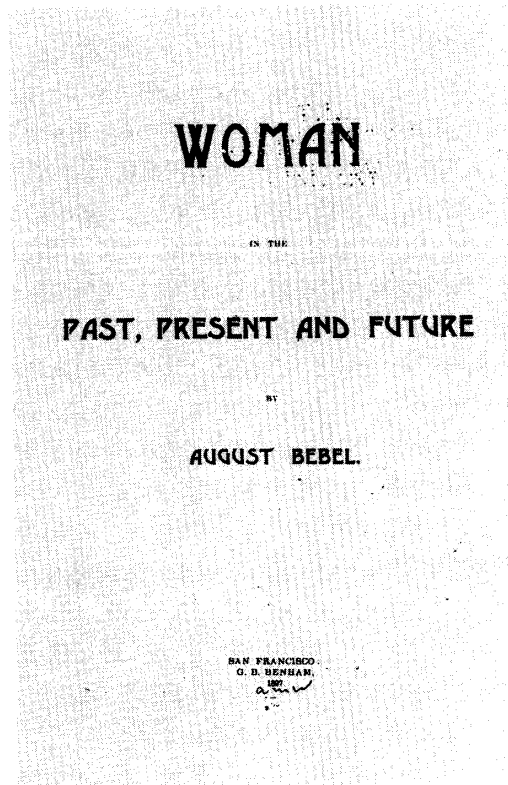
Women under socialism, translated from German of the 33d ed. by Daniel De Leon, New York, 1904 379P. 19 cm(New York Labor News)(A 191)



A 188



A 191



A 190

Women and socialism, translated by Meta L. Stern Hebe. New York, 1910, 512 P. 20cm (Socialist Literature co.) (A 187)

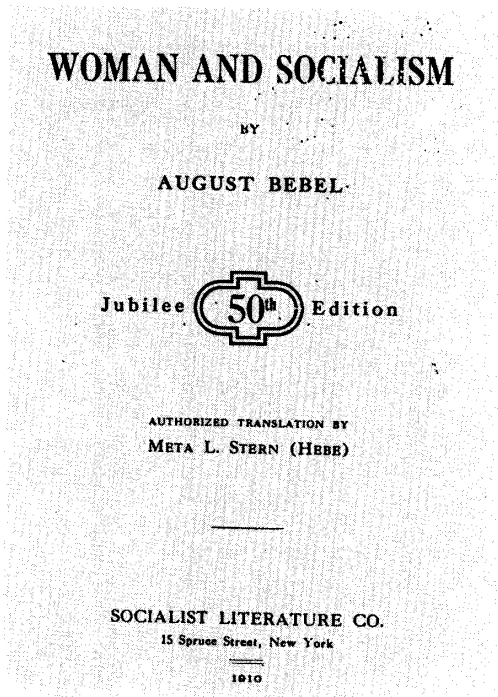
なお、H. B. Adams Walther訳のものはロンドンでも出されている (Gerritsenのフィルムには手書きで1886とある)。

Women in the past, present and future, translated by H. B. Adams Walter, London, 1886 264P. 20cm (Bellamy Library) (B 189)

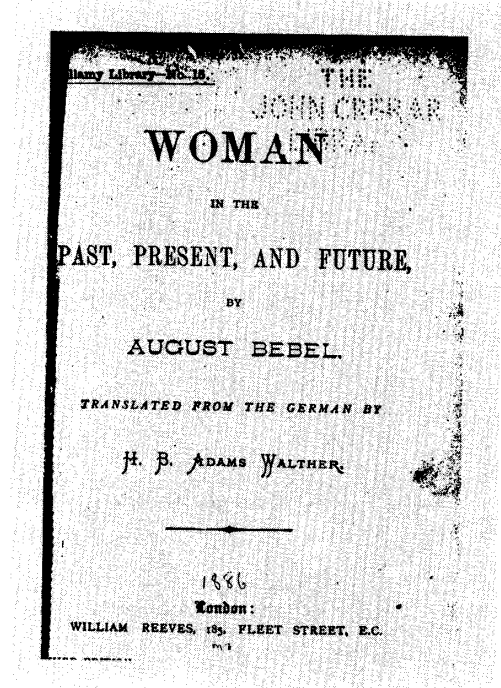
なお、この「ゲリッツエン女性史コレクション」には、この他、フランス語、オランダ語、イタリア語、スカンディナヴィナ諸国語、ラテン語、ギリシャ語、スペイン語、ポルトガル語、その他の言語の書物が収集されているから、ベーベルの書物『女性と社会主義』が、前述のように各国語に翻訳されているのを考慮すれば、このコレクションのベーベルのカヴァー度には多少の不満も残る。

3. わが国での紹介・翻訳状況と「女性文庫」

わが国最初の抄訳は村上正雄訳・山川菊栄序『社会主義と婦人』(1919年 三田書房 152頁)であった。この書は「女性文庫」に収録されている(女4-325,以下女性文庫関係のものはその番号を付す)。訳者村上は、ドイツ



A 187



B 189

語の原書が入手できないので、英訳から重訳すること、英訳は、知り得る限りで5種あり、シカゴのCharles H. Kerr & Companyからでている *Woman under Socialism* を注文したが入らないので、丸善から、*Women; in the past, present, and future* (Bellamy Library) を入手して「過去に於ける婦人の位置」を翻訳したことを序文に記している。村上は「私は、他日原書を手にするを得、併せてエッチ・ケルの英訳が着いた時、更に筆硯を新たにして、再び反訳の机に、向ふであらう」と序に述べ、「訳者は更に続いて最も興味ある、また本書の主眼たる『現在の巻』を訳出するであろう」と付記している。村上が5種の英訳ありといった点が注目されるが、シカゴ発行のものは「ゲリッツエン女性史コレクション」には見あたらず、その役者がエッチ・ケルという人物名なのであろうか。村上の訳がベラミー・ライブラリーであるとすると、1893年のアダムス・ウォルターの英訳からの重訳という事になり、原書第9版の「過去の婦人」の訳という歴史的価値がある。

わが国での最初の全訳は、その4年後、山川菊栄によって行われた。特筆すべきことは、山川菊栄による1923年の邦語全訳が、「ゲリッツエン女性史コレクション」のA 186の文献からのものであるということである。英訳者メタ・シュテルンは、残念ながら、この翻訳に当たっての序文も

後書きも残してはいない。本学「女性文庫」所蔵の山川菊栄訳『ベーベル 婦人論—婦人の過去・現在・未来』（アルス出版 1923 以下〈山川1〉と呼ぶ。「女性文庫」には、300-320-15と女41-3の2冊収録されている）の訳者はしがきに、シュテルンからの重訳である旨を記載している。ちなみに、山川のベーベルの訳本は、この他、本学「女性文庫」に、世界婦人文献 第7巻 『婦人の過去現在 未来』（世界文献刊行会 1925年 以下〈山川2〉と呼ぶ。「女性文庫」番号女03-7-7）および、社会思想全集 第11巻 オーギュスト・ベーベル著『婦人論』（平凡社 1828 以下〈山川3〉と呼ぶ。「女性文庫」番号女41-2-c）が収録されている。犬丸義一によれば（犬丸1980）、山川の訳は、1929年改造文庫に入れられたとの事であるが「女性文庫」には収録されていない。

〈山川1〉では、「第4篇 社会の社会化」の第20章の2、独語原文ではDie Expropriation der Expropriateure、英語原文では, Expropriation of the expropriatorsのところ、「□□□の□□」となり、かなりの行が削除されて空欄になっている。また、同篇、第23章、独語原文では, Aufhebung des Staats, 英文原文では Abolition of the Stateが、「□□の廃滅」となり、大幅に本文が削除されている。〈山川2〉は、本文の漢字すべて

にひらがなを付しており啓蒙用の普及版と見られるが、前記同箇所は、それぞれ、「収○者の収○」「○○の○○」とされ、本文中に伏字が多い。〈山川3〉では、同箇所は「徴収物の徴収」「××の廃滅」となり削除箇所の指摘がある。

ドイツ語原語からの最初の全訳は牧山正彦『婦人と社会主義』（1992年第1巻,1924年第5巻完結 弘文堂）であったが「女性文庫」には残念ながら収録されていない。

戦前には、他に加藤一夫訳『婦人論』（1928年 春秋社、「女性文庫」番号女41-1）、草間平作（牧山正彦）訳『婦人論』（1929年 岩波文庫,1952年改訳 1929年版は「女性文庫」になし,1952年版は女41-213-B）も出された。加藤一夫は、「私は本書を訳すに当たり、先ず、友人牧山正彦君の好意によって、独語原本の第50版からの直接訳を得、それを私が英訳と対照して、多少の手を加えたものである」（加藤 1928 p.20）と書いている。

加藤訳では、前掲「第4篇 社会の社会化」の第20章の2は「徴収物の（空欄）」となり、また、同篇、第23章は「××××」となって伏字、空欄が多い。

戦後は、1950年代に、前記草間平作の改訳の他2種の新訳が出されている。森下修一訳『婦人論』（1955年,角川書店,本学では「宮内文庫」として女41-213-1,2）、伊東勉・土屋保男訳『婦人論』（1955年,大月書店,「女性文庫」女41-143）がそれである。このようにわが国でも1910年代の終わりから1950年代の半ばまで、英訳からの重訳を含めて、また改訳を含めて、7人の訳者の手で7種の翻訳が出されている。伏字、空欄も埋められて、ベーベルの女性論が、わが国にその全容を示したのは、ようやく1950年代半ばということになる。

4. 「ゲリッツエン女性史コレクション」利用による研究の可能性

本学の両コレクションだけから、前述の目的に達する事には限界があるが、かなりの点で、ベーベルの女性論の再考はやりやすくなる。これまでのベーベルのこの書の変遷についての叙述は、西川（1980 pp.5-9）伊藤（1984 pp.304-307,1985 pp.69-73）等があるが、内容の深い検討という点では幾多の課題が残されている。

例えば、ベーベルのこの書の結びは、Dem Sozialismus gehört die Zukunft, das heißt in erster Linie dem Arbeiter und der Frau. である。シュテルンの英訳では、“The future belongs to socialism, that is, primarily, to the worker and to woman”である。山川菊栄訳になると「未来は社会主義のものである、即ち第一に、労働者と

婦人のものである」となる。この結びの文も、今世紀の前半迄には、20余カ国語に訳されて、女性解放運動に大きな影響を与えた。そして、今日この文をどう解釈すべきかが問題になる。そのためには、ベーベルが改訂を重ねていくどの段階で、この文が結びとして据えられたかが問われる。この間に、「ゲリッツエン女性史コレクション」は一定程度答えることができるであろう。

既述のように、本コレクションには、ドイツ語の原書では、1909年の最後の改訂以前のものである、初版と同内容と思われる1883年発行の2版(D 183)、2度目の1895年改訂の内容を伝える1900年発行の第31版(D 184)が入っており、最初の1891年改訂と3度目の1902年改訂の痕跡をとどめる版が欠けていた。また、原書33版からのDaniel DeLeon訳(1902)がA 191として収録されているので、これらを総合すれば、ベーベルのかなりの版に迫る事が可能に思われる。例えば、D 183は、序文、過去の女性、現在の女性、将来の女性、結語、という構成であり、かの有名な結びの言葉は現れていない。最初の1891年改訂版は、第9版であったが、同年の10版を都立立川短期大学図書館所蔵金子鷹之助文庫でみると、第9版への序言、序、過去の女性、現在の女性、将来の女性、国際関係、人口と過剰人口、結語、の章建てに変化しているが、上記最後の文は結語の末尾には現れてはいない（Bebel 1891 S.382）ことを確かめた上で、A 190を見ることにする。

A 190は、訳者序文も、目次もつけられていない。表題や、ページを追って目次や内容を確認した限りでは、1891年改訂版に基づいた訳とは思われない。

D 184は、まぎれもなく、1895年改訂の内容を伝えている。第25版への助言に続いて、序、過去の女性、現在の女性、将来の女性、国際関係、人口と過剰人口、結語、の章建てに変化は無いが、末尾に、Dem Sozialismus die Welt trotz alledem, das heißt in erster Linie dem Arbeiter und der Frau.と、今日の結語を連想させる文章が現れる。

A 191はどうであろうか。この英訳書で、はじめてわれわれは、訳者序に接することができる。目次は過去の女性が2章建て、現在の女性が7章建てに新しく編成されている。そして結びの文は、Ours is the world, despite all;—That is for the worker and for women.となっている。このように、「ゲリッツエン女性史コレクション」を利用して、ベーベルについて、いろいろと調べることが可能になる。

今回は、きわめて表面的な解説に終始したが、内容の検討によって、これまで未知の領域であったさまざまな分野で女性史を掘り起こしていくこと可能となろう。

引用文献 (著者名アルファベット順)

- Allendorf, R & others 1979: *100 Jahre August Bebel* "Die Frau und der Sozialismus", Die Frau in der DDR, Auslandspresseagentur GmbH. Berlin
- Bebel, A. 1891: *Die Frau und der Sozialismus—Die Frau in der Vergangenheit, Gegenwart und Zukunft*, Verlag von J.H.W. Dietz Stuttgart
- Bebel, A. 1979: *Die Frau und der Sozialismus*, Dietz Verlag Berlin
- Bebel, A. 1981: *Die Frau und der Sozialismus*, Verlag Marxistische Blätter Frankfurt am Main
- Bebel, A. 1983: *Ausgewählte Reden und Schriften*, Bd.6, Inst. Für Marxisums-Leninismus beim ZK d. SED, Berlin
- Bebel, A. 1989: *August Bebel. Zum siebzigsten Geburtstag*, 22. Feb. 1910 : Riprint d.Unikas aus d.Zentralen Parteiarchiv d.SED/ Nachbemerkung von Ursula Herrmann. Dietz Verlag, Berlin
- Gemkow, H. & Miller, A. 1990: *August Bebel <— ein prächtiger alter Adler >* Dietz Verlag Berlin
- 犬丸義一 1980: 「ベーベル『婦人論』刊行百年によせて——日本への翻訳ノート」『歴史評論』1980.1
- 伊藤セツ 1984: 『クララ・ツェトキンの婦人解放論』有斐閣
1985: 『現代婦人論入門』白石書店
1992: 「ゲリッツエン女性史コレクションにおけるアウグスト・ベーベル関係資料」昭和女子大学女性文化研究所 Working Paper No.4 1992.3
- 掛川典子 1992: 「ゲリッツエン女性史コレクションについて」昭和女子大学女性文化研究所 Working Paper No.4 1992.3
- 倉田 稔 1975: 「ベーベルのはじめの婦人論(1)」『人文研究』49輯
1979a: 「ベーベルのはじめの婦人論(2)」『人文研究』58輯
1979b: 「ベーベルと婦人の解放」季刊『女子教育もんだい』1979秋号
1989: 『ベーベルと婦人論』成文社
- 土屋保男 1979: 「ベーベル『婦人論』のすすめ」『婦人通信』1979.3
- 西川正雄 1980: 「『婦人論』とアウグスト・ベーベル」『歴史評論』1980,
- Seebacher-Brandt, B. 1988: *Bebel—Künder und Kärmer im Kaiserreich*, Verlag J.H.Dietz Nachf. Berlin, Bonn
- 白井厚 1979: 「私にとってのベーベル——『女性と社会主義』刊行百年に際して」『女子教育もんだい』1979年秋号 (白井厚・堯子『女性解放論集』慶応通信1982収録)
- Stroeck, J., Sump, F., Becker, D.F., Kontny, B. und Pschorn, H. 1989: *August Bebel Veröffentlichungen von und über August Bebel in der DDR*, Inst. Für Marxisums-Leninismus beim ZK d. SED, Berlin
- 山川菊栄訳 1923: 『ベーベル 婦人論—婦人の過去・現在・未来』アルス出版
1925: 『世界婦人文献 第7巻 婦人の過去 現在 未来』世界文献刊行会
1928: 『社会思想全集 第11巻 オーギュスト・ベーベル著 婦人論』平凡社
- Women's department of SED ZK 1979: *International Conference of the SED Central Committee to mark the 100th anniversary of the publication of August Bebel's book "Women and Socialism"* Berlin 23-25 Feb.1979, Conference Papers, Part 1 & Part 2, Berlin
- 柳 秀子 1986: 「『女性文庫』の由来と課題」『女性文化研究所紀要』No.1
1991: 「『女性文庫』目録の作成にあたって」『昭和女子大学女性文庫目録』
1992: 「『女性文庫』目録の作成を担当して」『女性文化研究所紀要』No.1